

## 【学年・教科・単元名】

7年生 保健体育科 「チームで協力してタイムを縮めよう～実践と観察のコラボ～」

## 【経緯】

短距離走は、スタート・加速疾走・中間疾走・フィニッシュの4つの局面に分けられる。一般的には、スタートから加速の局面においては、前傾姿勢がよいとされるが、自分の身体がどうなっているのか、どのような姿勢で疾走しているのか、ということ把握することは、熟練者であっても難しい。そこでグループで動きについて観察し合い、動き方について考えることによって、協働的に学びながら身体の動かし方への理解を深めると共に、自分の動きについて探究的に思考する場面として授業を設定した。

## 【取組の実際】

陸上競技の短距離走のスタート場面に焦点化した本授業は、動いてみた感覚と観察したことを話し合わせる場を設定し、仲間とともに学ぶ協働的な学習場面を設定した。具体的には、自分ではある課題に取り組んでいるけれど、改善や習得ができていないのか、という走者の感想や思いを尊重して話し合わせるようにした。そうすることで、例えば、「腕振りをよくしようと思うんだけど」という子供の動きを見て、まだ、「一生懸命振っているのはわかるけど、まだ横に振ってないかな」という意見や、「腕振りはよくなっているから次は前傾姿勢だね」、と違う課題に注目したらいいのではないかと、という意見などがもらえ、走者の感覚と観察者の意見のずれを修正して学習に取り組んだ。その結果、子供にとって何に取り組めばよいのかということが明確になり、何度もスタート練習に取り組む中でよりよいスタートの動きを習得しようとする姿が見られた。

手の幅はこれくらいがいいんじゃない



## 【取り組み後の子どもたちの姿】

○本実践においては、まず走者が自分の感想を述べ、その意見と観察した事象をもとに話し合いを進めるようにした。その結果、走者が大切にしていることと、観察の結果、修正した方がよいと感じる点にずれが生じることがあった。これは、感想にも「自分では腕振りを頑張っていたが、横に振っていた」や、「前傾姿勢をめざしていたが、背中が丸まっているだけで、前傾になっていなかった」など、取り組んでいるが十分でなかったという子供の認識からも見取ることができる。この点に気付くことで、主体的に教師に習得するためのコツやポイントを尋ねたり、習得するまで粘り強く動き、試したりする子供の姿につながったものと推察される。

○子供たちは、走った後、すぐにグループで集まり話し合っている姿が多くあった。今回は、個でも取り組むことが可能な運動を素材として、意図的にグループでかかわる場面を設定し、よりよい動きの習得を目指して教材化した。体育科や保健体育科では仲間とのかかわりが重視されるが、動きの獲得や質の向上のためにかかわるのである、という目的を忘れてはならない。子供たちが、何のためにどのようなことを話し合うのかを明確にもっているからこそ、実りある話し合いにつながっていたと思う。